

極早生温州に対する植物調節剤と機械油乳剤混用による枝別全摘果法

[要約] 極早生温州の枝別全摘果剤として、植物調節剤のエチクロゼート乳剤(200ppm)に機械油乳剤97%(200倍)の混用液を満開約20日後の生理落果最盛期に散布することにより摘果効果が高く落葉も少なくできる。

三重県農業技術センター・紀南かんきつセンター・かんきつ担当 連絡先 05979-2-0008

部会名	果 樹	専 門	栽 培	対 象	果樹類	分類	普及
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

[背景・ねらい]

極早生温州(「崎久保早生」)の枝別全摘果剤として、エチクロゼート乳剤単用散布では散布後の気温条件の違いにより効果が不安定な事例が見られる。そこで、植物調節剤(エチクロゼート)と機械油乳剤の混用散布を、より効果の安定した枝別の全摘果法を確立するために検討した。

[成果の内容・特徴]

- 1 エチクロゼート乳剤と機械油乳剤97%の混用散布は摘果効果が高く、エチクロゼート乳剤とエテホン液剤の混用散布より落葉が少ない。また、エチクロゼート乳剤と機械油乳剤97%およびエテホン液剤の3剤の混用散布では摘果効果は高いが落葉も多い(表1)。
- 2 エチクロゼート乳剤と機械油乳剤97%混用液の散布時期は、満開約9日後よりも21日後の生理落果最盛期の方が良い(表2)。
- 3 摘果剤の散布による収穫果の果実品質への影響は見られない(表3)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 極早生温州の枝別全摘果剤として利用できる。
- 2 散布は、摘果剤散布用霧無しノズルを使用し、葉から薬液がしたたり落ちる程度に散布する。
- 3 生理落果最盛期は年により多少前後するので、生理落果を観察してから散布を行う。
- 4 散布による摘果効果は気温の影響を受けるため、気温の高い日を選んで散布するよう心がける。
- 5 散布に当たっては既存の全摘果剤の使用に準じる。

[具体的データ]

表1 各種混合剤が生理落果に及ぼす影響

処 理 区	落果率 (%)		落葉率 (%)	
	H 6	H 7	H 6	H 7
エチクロゼート(200ppm)+エテホン(50ppm)	91.5 b	88.8 a	12.2 b	3.5 b
エチクロゼート(200ppm)+機械油(200倍)	92.1 b	86.2 a	4.3 c	0.4 b
エチクロゼート(200ppm)+エテホン(50ppm)+機械油(200倍)	100.0 a	97.3 a	41.7 a	14.8 a
無 処 理	68.6 c	70.7 b	3.5 c	1.2 b
有意性	*	**	*	*

注) 処理日 調査日
 H 6. 5. 27 (満開21日後) H 6. 6. 27
 H 7. 5. 31 (満開21日後) H 7. 6. 27
 英小添字はDuncan's multiple range test(**1%、*5%)により異符号間に差あり(以下の表同じ)。

表2 混合剤の処理時期の違いが生理落果に及ぼす影響

処 理 区	処 理 日	落果率 (%)
エチクロゼート(200ppm)+機械油(200倍)	5月19日(満開9日後)	90.2 ab
エチクロゼート(200ppm)+機械油(200倍)	5月31日(満開21日後)	93.6 a
無 処 理		87.7 b
有意性		*

注) 調査日 H 7. 5. 19 (散布前・満開9日後)
 H 7. 6. 27

表3 各種混合剤が果実品質に及ぼす影響

処 理 区	果実重	果皮色	糖度	クエン酸
	(g)	(cc)	(%)	(%)
エチクロゼート(200ppm)+エテホン(50ppm)	66.5	2.9	11.5	1.19
エチクロゼート(200ppm)+機械油(200倍)	71.5	2.8	11.5	1.29
エチクロゼート(200ppm)+エテホン(50ppm)+機械油(200倍)	74.3	3.0	11.6	1.11
無 処 理	67.0	2.8	11.2	1.06
有意性	—	NS	NS	NS

注) 散布日 H 7. 5. 31 (満開21日後)
 果実品質調査日 H 7. 10. 16

[その他]

研究課題名: カンキツの省力栽培技術の確立(摘果剤利用技術の確立)
 予算区分: 県単
 研究期間: 平成9年度(平成6年~8年)
 研究担当者: 市ノ木山 浩道